

西トップ遺跡中央祠堂の建築調査

—2018年度の成果—

はじめに 西トップ遺跡中央祠堂は、基壇部、基壇上の祠堂本体にあたる躯体部、その上部の屋根部分にあたる屋蓋部で構成される。いずれも砂岩製であるが、躯体部開口部の装飾楣石と装飾柱が10世紀のバンテアイ・スレイ様式であること、砂岩基壇の内部に前身建物とみられるラテライト製の基壇があること、発見された碑文に10世紀初頭に建立したという記述があることから、10世紀頃にラテライト基壇を持つ祠堂が建てられ、後に躯体部以上を現在の砂岩製ものに造り替え、基壇も砂岩の外装を付加したと考えられていた¹⁾。

2011年以降、解体・再構築作業が進み、解体の過程で建造物調査も並行しておこなっている。2018年度は、西北部の砂岩製基壇外装と西面階段を解体し、内部のラテライト基壇の調査をおこなった。

ラテライト基壇の構造と平面形状 ラテライト基壇の構造は以下の通りである。基壇は、上成・中成・下成の大きく3段で構成される(図22・23)。上成基壇は、上から葛石上、葛石下、羽目石上(モールディングあり)、羽目石中(なし)、羽目石下(あり)、地覆石、延石の7石で構成する。中成基壇は、葛石、羽目石1段目(モールディングあり)、羽目石2段目(なし)、3段目(あり)、4段目(なし)、5段目(あり)、地覆石、延石の8石で構成する。下成基壇は、葛石上、葛石下、羽目石(モールディングなし、3石)、地覆石、延石の7石で構成される。

ラテライト上成基壇の構成は、砂岩基壇の中成基壇、南祠堂および北祠堂の基壇とほぼ同じ構成であるが、ラ

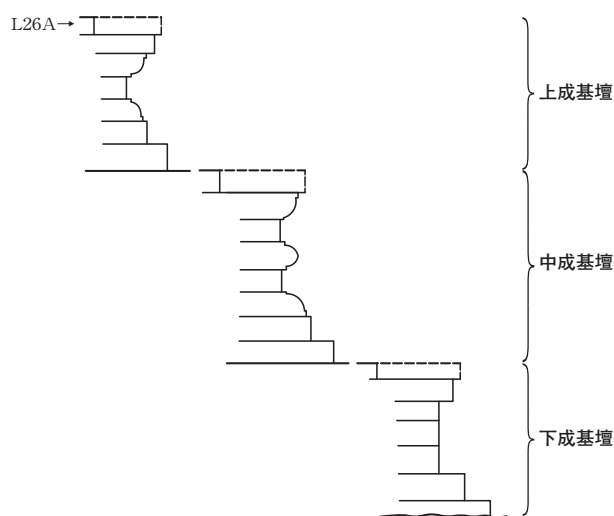


図23 ラテライト基壇標準断面模式図

テライト中成基壇のように羽目石が5石で中央の羽目石にもモールディングを施す構成は、西トップ遺跡では初めての例である。

ラテライト基壇の平面形状は、正方形を基本として4辺に張り出しを設け、さらに階段部分を突出させる。また、4辺の張り出しの出隅部分に、150~250mmの小さな欠き込みを加えており、上中下すべてのラテライト基壇に共通する特徴である(図24・25)。

砂岩基壇とラテライト基壇の関係 後に付加されている砂岩外装は、ラテライト基壇を覆い隠すように増築されていた。砂岩外装を設置する際に、ラテライト基壇とぶつかる部分はラテライトを削ったり抜いたりしており、ラテライト基壇との間に隙間がある場合は、砂岩チップを多量に含む土で埋められていた。

ラテライト基壇各段の最上層は、基壇の葛石および基壇上面の敷石となる層であるが、すべての段で、葛石に相当する外周部の石材が取り除かれていた。中成・下成基壇では、この部分に砂岩の葛石もしくは敷石が載る。おそらく、砂岩基壇へ転換する際に、基壇自体の高さは



図22 ラテライト基壇西南部(南西から)



図24 ラテライト中成基壇張り出し部の欠き込み

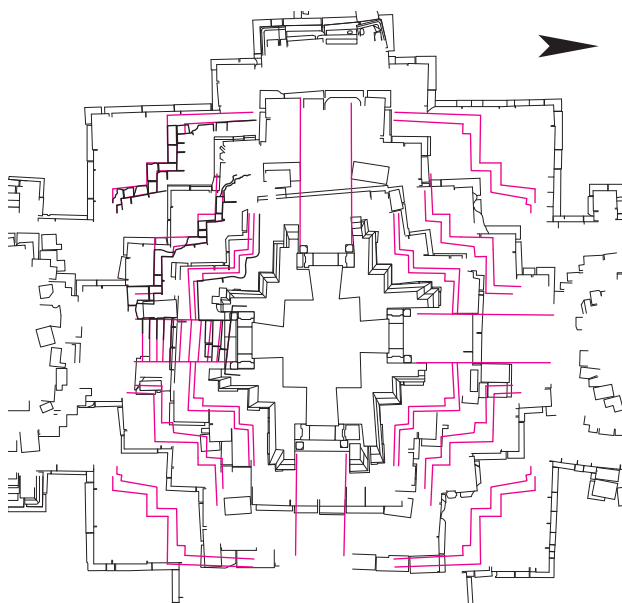


図25 ラテライト基壇平面図 1:200(太線:残存部分、赤:残存部分から想定)

変更せず、目に見える部分のみを砂岩に置き換えたと推測される。上成基壇ではラテライト基壇を隠すように成の高いパネル状の砂岩外装を立てる。この石は葛石2石目の上面以上の高さがあるが、葛石1石目上面よりは低い。おそらく、パネル状の砂岩外装を設置する際にラテライト基壇の葛石が邪魔になり、取り外されたとみられる。なお、砂岩上成基壇の葛石とみられる石材が散乱石材も含めてはばないことから、砂岩上成基壇は当初より葛石を設けず、基壇上面はラテライト基壇の上面が露出していたようである。

中央祠堂躯体部とラテライト基壇の関係 以上の成果を踏まえた上で、ラテライト基壇と中央祠堂躯体部の関係に注目してみたい。中央祠堂躯体部地覆石(L26)、ラテライト上成基壇最上層(L26A)、砂岩上成基壇のパネル状の石材(L27)、の位置関係を見ると、L26Aの残存石材の位置と、L26の石材の位置がほぼ一致する(図26)。これは、ラテライト上成基壇外周部の石材を取り除く段階、つまり、砂岩の基壇外装に転換するタイミングには、すでにラテライト基壇の上に砂岩製の躯体部が載っていたことを示す。すなわち、それぞれの年代はともかく、少なくともラテライト基壇の構築→砂岩躯体部の構築→砂岩基壇外装の付加という工程が認められよう。

また、平面形状にも着目すると、躯体部の4辺の突出部の出隅部分にはラテライト基壇と同様の小さな欠き込みがあり、両者が平面的にも共通することがわかる。一方で砂岩基壇にはこの欠き込みは認められない。

さらに、開口部の石材の位置にも注目すると、躯体部開口部の装飾柱礎石(砂岩製)は、L26Aと上面を揃えて

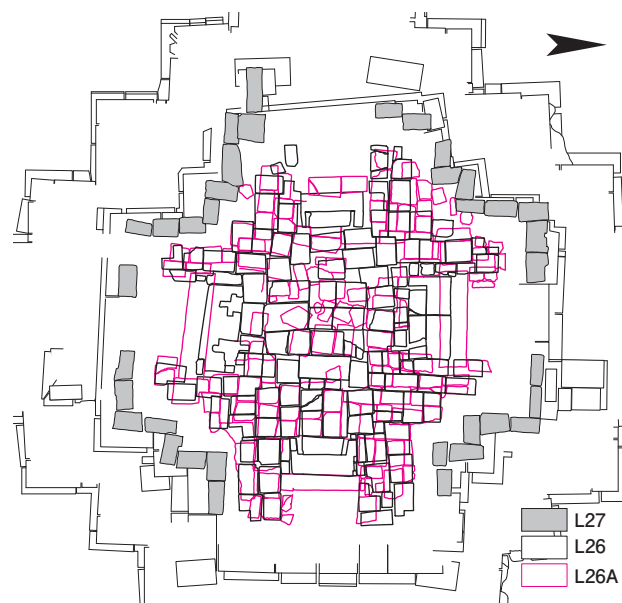


図26 ラテライト上成基壇残存敷石と躯体部との関係 1:150

設置されている。L26Aの上面には、この装飾柱礎石を後から嵌め込んだ改造痕跡は確認できなかった。また、上成基壇の砂岩階段石を解体したところ、装飾柱礎石とその下に位置するラテライト石材は見付面をそろえており、少なくとも、ラテライト基壇にともなう階段は装飾柱礎石よりも内側に入り込んでいない。クメール建築の平面形状の変遷²⁾からも、装飾柱礎石がさらに外側に位置していた可能性は考えられず、現在の装飾柱礎石は、ラテライト基壇と同時期のものであり、その位置も当初から変更されていないと判断できる。

以上の検討を合わせると、現在の砂岩躯体部と内部のラテライト基壇が同時期のもので、後に基壇のみを砂岩製に造り替えた可能性が高い。

今後の課題 今回の調査では、これまで考えられてきた西トップ遺跡の変遷過程と建立年代を見直す大きな成果を得ることができた。ただし、状況証拠に依るところが多く、様々な可能性を考慮しながら、これらを補完するための調査研究が必要である。特に、ラテライト基壇については、石材に施されたモルディングの技法や、基壇の平面形状の年代的特徴、中央祠堂砂岩躯体部と砂岩基壇の技術的な差異などに注目し、調査を進める予定である。今後、解体作業が進行する中で、今回調査していない階段部や東前面の当初形状を確認し、ラテライト基壇の全体像を解明していきたい。(大林 潤)

註

- 1) 奈文研『西トップ遺跡調査報告』2011。
- 2) 片桐正夫編『アンコール遺跡の建築学』連合出版、2001。